

生駒山にあったプラネタリウム

新展示はミノルタMS-10型プラネタリウム

今回の科学館リニューアルにともない、科学館の地下1階のホワイエ(プラネタリウムの改札前の空間)に新たな展示が登場しました。ミノルタカメラ製のMS-10型プラネタリウム(写真1)です。

大阪市立科学館のプラネタリウムは、歴代インフィニウムという名前の機械を使っていますから、ご覧になった方は「なぜMS-10型があるの?」と思われるかもしれません。実はこの機械は、かつて大阪と奈良にまたがる生駒山の山上にあった生駒山宇宙科学館で活躍していたプラネタリウムなのです。

生駒山宇宙科学館は1969(昭和44)年に開館した施設です。宇宙に関するさまざまな展示やプラネタリウム、天体望遠鏡などがあり、「生駒の科学館」として親しまれていました。1997(平成9)年には生駒コズミックシアターとしてリニューアルしましたが、残念ながら1999(平成11)年に閉館しました。このMS-10型プラネタリウムは、閉館後に近畿日本鉄道株式会社から大阪市に寄贈されたものです。

ちなみに現在、科学館の展示場4階に展示している60cm反射式望遠鏡も、かつて生駒山宇宙科学館で使われていたもので、MS-10と一緒に寄贈されました。この望遠鏡については、『うちゅう』2022年3月号で松岡義一さんが詳しく紹介しておりますので、併せてご覧ください。



写真1:新しく展示されたミノルタカメラ製MS-10型プラネタリウム(2024年6月撮影)

生駒山のプラネタリウム

ところで、生駒山のプラネタリウムの歴史は古く、1951(昭和26)年にまで遡ることができます。同年、近鉄と朝日新聞社、生駒天文協会の共同より生駒山天文博物館が設立され、開館しました。この天文博物館に、アメリカのスピッツ社製のプラネタリ

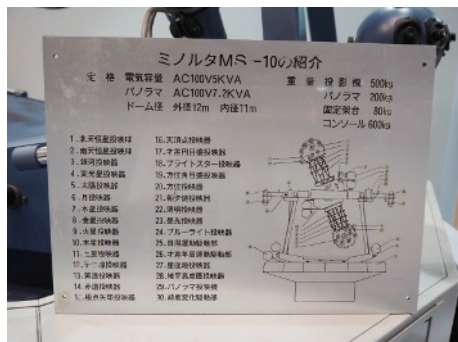


写真2:MS-10型プラネタリウムの紹介パネル

ウムが導入されました。ピンホール式の小型の機械ですが、日本でのプラネタリウムとしては、1937(昭和12)年開館の大阪市立電気科学館、1938(昭和13)年開館の東日天文館に次いで、3番目となります。

その後、天文博物館は1968(昭和43)年に閉館となり、翌年にオープンしたのが生駒山宇宙科学館です。プラネタリウムは、直径7メートルのドームに金子式のジュピターJL-2型というピンホール式の機械が入りました。

生駒山宇宙科学館のMS-10型プラネタリウム

ジュピターJL-2型は1984(昭和59)年に引退し、同年新たに導入されたのがこのMS-10型投影機です。ドームも直径12メートルになっていますので、新たに作り直されたようです。

MS-10は、天体の投影にレンズを使った光学式プラネタリウムで、約6,200個の恒星、太陽、月、5つの惑星などが投影でき、また日周運動・年周運動・緯度変化・歳差など多彩な機能を持った機械です。加えて本体には朝夕焼けと薄明、方位、子午線、黄道、赤道などの各種映射器も付属していますので、一見コンパクトながら複雑なメカという印象を受けます。

静態展示のため動きませんが、保存状態は良く、活躍当時と変わらない姿をご覧いただけます。MS-10の紹介パネル(写真2)も、当時掲示されていたものをそのまま展示しています。かつて生駒山宇宙科学館に通い、このMS-10型が映し出す星空をご覧になった方にとっては、とても懐かしく感じられるのではないかと思います。

大阪市立科学館には、ほかにもツァイスⅡ型、大西式プラネタリウム、金子式プラネタリウムK型なども展示していて、プラネタリウムの歴史の流れを知ることができます。お越しの際は、ぜひご覧になってください。

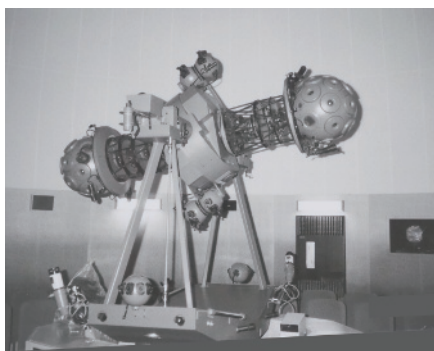


写真3:現役当時のMS-10型プラネタリウム

嘉数 次人(科学館学芸員)